

よろこびの泉

わたし(イエス・キリスト)が与える水を飲む者はだれでも、決して渴くことがありません。わたしが与える水は、その人のうちで泉となり、永遠のいのちへの水がわき出ます。

新約聖書 ヨハネ4:14



なかよし兄弟

和らぐ

河野 進

おさなごの微笑みに

慰められない悲しみはあるだろうか

おさなごの微笑みに

反省しない怒りはあるだろうか

おさなごの微笑みに

恥じない不平はあるだろうか

おさなごの微笑みに

和らげられない苦しみはあるだろうか

河野 進詩集「母よ、幸せにしてあげる」より

発行所 奈良県生駒市門前町七-四〇 日本ミッション
〒630-0266 電話〇七四三(七三)一七五四 振替口座〇〇九〇(一六六四)番

発行人 ファアベイ・D
編集人 日本ミッション編集部

印刷所 埼玉県比企郡鳩山町熊井一七〇
〒350-0303 新生宣教師印刷部
電話〇四九(二九六)〇七二七

一年分 送料共 九〇〇円
定価 一部 一八円



問

16年前、初めて我が子を抱いた時、「天使がこの家に舞い降りた」「地球の未来を背負って立つ子を神様から預かった」と思えたのに、高校生になって反抗し、手に負えない子になってしまいました。どこが間違っていたのでしょうか。

答

どの親も、ことに母親は「私にこんな素敵な赤ちゃんが生まれた」と、我が子に惚れ、愛の限りを尽くして立派な人に育てたいと決心します。新米のお母さんは理想的な育児をしようと、育児書を何冊も買って、書いてある通りのノウハウや、幼児英才教育に一生懸命になります。小学校時代は親の指示通り、素直で良い子、秀才ぶりを発揮して、母親を大いに喜ばせます。学習塾、ピアノやサッカー教室で頑張る我が子に目を細め、親の方が同年代の子に対して競争意識を持ち、子どもは母親の期待に応えようと辛い気持ちを表に出しません。我慢して良い子を演じているのです。中学生になれば親の操作は次第にきかなくなり、高校に進学して体が親を追い越すようになると、親に猛然と反発し始め「これまであんなに良い子だったのにどうして?」と、子供が精神的自立を求めている内心を、思い計ることができない親は悩みます。親から子どもへの要求が高いほど、そこから逃れたい気持ちの外に現れると暴力となり、内にこもると不登校や引きこもりとなるのです。子どもは、神の形を秘めた、独立した人格を持つ尊い存在として、神様から親に託されています。聖書には、我が子を導いてくださいと神に委ねて大成した、新約聖書にはテモテ、旧約聖書にはサムエルの物語があります。その他、子どもの問題を抱えて悩む親が、イエス・キリストの許にきて助けを求め、問題の子が造りかえられ、世界の歴史を愛する人とされたという証しが沢山あります。創造主こそ、その子に最善の道を歩ませたいと計画を描いて、御許に求めるのを待っておられるのです。あなたがまず教会においておられる神様を知り、神に導かれる人生を歩んでください。「わたしはあなたがたのために立てている計画をよく知っている。それは……、平安を与える計画であり……、将来と希望を与えるものだ。」(エレミヤ29・11) (児玉 博之)

親と子のしあわせ

391

私が勤める幼稚園の子どもが、こんなことを言いました。

「先生、昨日パパとママが、大げんかしていたよ。僕は、テレビを見ていたけど聞いていたんだ。」「うちもよくけんかするよ。また、ままごと遊びをしている時のこんなセリフ。」「お父さん、ゴミ出してね。お仕事がんばってよね。」「早くしないと遅刻だよ。お父さんしっかりしてよ。」等々。ご家庭の様子が見えてきます。

子どもたちは、お家でのことをよく話します。あー、私の子どもたちもこんな風に話していたんだと思うと、恥ずかしいなと思います。子どもたちは、お母さんやお父さんのことをよく見て、よく聞いています。

特にけんかは、印象に残るのかよく話します。テレビを見ているふりをして、実は聞いているのです。子どもたちは、どんな思いでしょうか。意見の違いやお互いの勘違いはあります。でも、なるべく子どもたちの前では、けんかをしない方がいいでしょう。けん

かをしたときは、謝るのも子どもたちの前でしたらどうでしょうか。子どもたちはきっと安心します。

卒園式である子が、「お母さん、私のために幼稚園のお仕事がんばってくれてありがとう」と言いました。この子のお母さんは、幼稚園の役員をして下さっていました。その様子を見ての言葉です。また卒業文集に、ある子は、「お父さんみたいに強くなりたい」と書いていました。子どもたちは、お父さんお母さんが大好きです。その姿をよく見えています。お父さんのがんばる姿、強く守ってくれる姿、お母さんの優しさ、言葉、みんな吸収しています。そう思うのですが……つい、と反省ばかりです。

だから怒りすぎたら「ごめんね。お母さん怒りすぎた。」「お父さんとけんかしてごめんね。でも仲直りしたよ」と、素直に言えたらいいなあと思います。

「何事でも自己中心や虚栄からすることなく、へりくだって、互いに人を自分よりもすぐれた者と思いなさい。」 (ピリピ2・3)

(相原 幸紀美)



*この「よろこびの泉」は、統一協会、エホバの証人、モルモン教のものではありません。これらの問題でお困りの方は、上記の教会にご連絡ください。

I面写真: 山川哲平氏

●質問箱への投書(100文字以内)よろこびの泉に関するお問い合わせは lzumi@japanmission.org まで

魂の再生

横浜市 和光 佳子

海外出張の多かった夫が、何とベルギーでクリスチャンになる決心をして帰って来たのです。それでも夫婦仲はしつくりせず……。ある時、夫が借りてきたパット・ブーン著『奇跡の日々』という本を読むうちに、クリスチャンって何と生き生きしているのだろう、私も生まれ変わりたいと願うようになりました。



▲自宅の庭で

私は一九四三年十一月、台湾で生まれ、戦後、熊本で大きくなりました。二十三歳の時に結婚し、平凡な主婦として過ごしていましたが、娘が教会付属の幼稚園に入園して初めて、クリスト教に触れるようになりました。行事の時とか、クリスト教の記念日には園長である牧師の話がありました。そして幼稚園で、一人のクリスチャンのお母さんに誘われて、家庭集会に出席しました。そこで話の中で、戦時中、牧師夫人のお父さんは牧師であったため、治安維持法に抵触したという理由で刑務所に収監され、殉教されたという事を知りました。この事はクリスト教信仰に対して、私に少なからぬ衝撃を与えました。

悩みの中で

結婚以来、私は問題を抱えていました。夫の家族と価値観の違い、良い関係が築けなかったのです。又、抑圧的で冷たい両親の許に育った夫は、性格が両親にそっくりで、私たちの夫婦仲は良くありませんでした。それで、仕事の関係で海外出張が多い夫の留守中にほっと一息つくという感じ

更なる悩み

加えて小学三年生になっていた一人娘が、それまでは元気で明るい子だったのに、暗い顔をして指しやぶりをし、爪を噛むようになっていました。近所の同じクラスの友達とは変わらぬのに。私は自分の子育ての何処が悪かったのかと悩みました。原因は担任の先生にありました。今まで接してきた大人と違っていたので不信感を持ったようです。娘は「周りの大人は子どもを大事にし、守ってくれ」と言いました。一・二年の時の担任だった先生に相談しました。それは、この先生が娘のことを「子どもだけでも感覚は大人だから、高学年になった時、担任によっては問題が起こるかも」と言われていたからです。それで、娘の性格をよくわかって下さっていた先生のアドバイス通り、娘が喜ぶような事を心がけ、くつろげる様にと努めました。そして半年経って担任が変わり、娘は次第に元気になりました。

夫婦喧嘩の最中に「姑の言葉

ある夜夫婦喧嘩をしている時、出雲の旅行のお土産をもって夫の両親が立ち寄りしました。出雲の

縁結びの神様にお礼のお参りしてきたと言うのです。夫は「今、別れ話の最中だ」と言いました。舅が「別れていいことがあるか？」と私に聞きました。私は「疲れてしまって、人生やり直したい」と答えました。すると姑が「佳子さんはしつかり家庭を守って子供もちゃんと育てている。あなたの弟は嫁さんを大事にしている。信一(夫の名)も大事にしなさい」と言うではありませんか。もうびつくりしてしまい、二人とも喧嘩していたことを忘れてしまいました。私は姑に一度だつて褒められたことがなかったからです。親から言われた事もあり、夫も改めるからと言ってくれ、それで私も様子をみる事にしました。

パットブーンの証し

そんな中、夫が教会の姉妹からパット・ブーン(アメリカのポピュラーソング歌手)の書いた「奇跡の日々」という本を借りてきました。読んでいる内、クリスチャンは何と生き生きとしているのだろう！私は確かに生きてはいるけれども、私の魂は死んでいると思えました。まさに、聖書の詩篇119・25にある通り「わが魂はちりについています。み言葉に従って、わたしを生き返らせて下さい。」状態でした。

更に読み進む内に、私は人を裁く資格がないのに夫の両親を裁いていたことを示され、イエス様が私の罪のために十字架にかかり死なれたことが分かりました。同時に涙があふれ、鼻水は出るし、悲しくもないのにこれは一体何だろうと思えました。それで、夫が行っている教会で、メンバーの精神科医の姉妹にこのことを話しました。すると彼女は「貴方は救われたのよ。洗礼を受けなさい」と言ってくれました。

その時から私の心の中に、何か暖かいほっこりした喜びがいつもある様になりました。そして後日、自分の罪を示された私は夫の両親に謝罪しました。そして日本ホーリーネス教団横浜教会で、一九八五年五月二十六日のペンテコステの日に、尾花晃先生に洗礼を受けて頂きました。

受洗を知った私の友人の中には「貴方が洗礼を受けてクリスチャンになるなんてびつくりだわ。今度お饅頭用意しておくから話に来て」とか、「ご主人が病氣した訳でも失業した訳でもないし、貴方も子供も元氣よね。貴方は山、谷が深い人なのね」と言われました。

それからは教会生活を通して、また牧師先生や兄弟姉妹の証詞を通して、どのように実生活を送ったら良いか教えて頂きました。ある時、高齢の姉妹が「神様は最善以下のことはなさいません」と言い切られ、それはクリスチャンとして日が浅かった私にはインパクトのある言葉でした。震災や戦争を経験し、その上、女手一つで息子さんを育てて来た方でしたから。私も、神様から色々な訓練や試練を受けましたが、本当にその通りだったのです。足りない私でしたが、その都度み言葉に支えられ、励まされ、慰められ、問題を解決していただきました。

私はクリスチャンだから

十五年前、父と同じ大腸がんの、そして同時に胆石の手術を受けました。一寸様子が変わったので病院で検査を受けたら明日入院しなさいと宣告され、み言葉を下さいと神様に祈りましたら「心をつくして主に信頼せよ。すべての道で主を認めよ」(箴3・5〜6)が示されました。手術当日、手術室から迎えが来た時、私と娘は



こんな会話を交わしました。「取れた胆石はアクセサリーになるかも知れない。私のものだからネコババされないようにね。」「ついでにおなかの脂肪も取ってもらったら。」「それは別料金で高いわよ。」「連れにきた看護助手の人が、術後、別の階にいた私のところまで来て、「どうしてあんなジョークが言えたの？」と聞いたので、「私はクリスチャンだから」と答えました。どんな時にも平安でいられるのはクリスチャンの特権だと思えました。その後には元気に過ごしています。私たち家族はイエス様によってクリスチャンホームになり、娘もアメリカでクリスチャン男性と結婚し仲良く暮らしています。神様は家族関係も完全に修復してくださいました。

私たちは三月に金婚式を迎えました。夫は七十五歳、私は七十三歳です。「主は万事を益として下さるお方です。」歩いてきた道を振り返ってそういえます。すでに天に帰られた兄弟姉妹から私が教えて頂いた事を、次の時代の人たちに伝えて行きたいと願っています。